



TITLE:

満洲の火山に就て

AUTHOR(S):

田中, 秀作

CITATION:

田中, 秀作. 満洲の火山に就て. 地球 1924, 1(3): 239-243

ISSUE DATE:

1924-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182652>

RIGHT:

滿洲の火山に就て

田 中 秀 作

滿洲は東亞の邊縁に位し、其の一部は朝鮮と共に所謂滿鮮半島を成し、リヒトホーフエンが稱へた地壇の縁 (Staffelrand) であつて蒙古高原の東の縁たる興安嶺の東方の低所が滿洲の主要部分の松花江遼河流域の平野に當り、其の東方に長白山脈が高まり更に其の東方に豆滿江鴨綠江の地溝帶がある。ジュースは是等の地形をイルクツク地方大陷沒地を中心として東南方に押し寄せた一種の波及地形の一部と見てゐるが何れにしても高地と低地との排列は大體に於て規則正しく、而して高低兩地形の限界は斷層をなし、地帶構造上の裂罅線となつてゐる。興安嶺の東邊、長白山系の西邊及び其の東邊の斷層線の如きは是であつて是等の多くは火山又は火山的地形を伴つてゐる。就中長白山系の西邊及び興安嶺の東側の線は其の最も著しいものである。

右の第一の部類に屬するものに滿鐵長春の南方大屯驛附近の玄武岩の火山的地形から吉林省北東部にかけての同岩の種々の地形及び滿鐵沿線に散在する二三の溫泉の湧出がある。又松花江の支流 Hona Ho (蛤蟆河) 上流附近の火山地形の記事は一九一九年八月號の倫敦ジオグラフィカルジャー

ナル所載アーサーソフビー Arthur Sowerby 氏の Exploration of Manchuria 中にある。ソフビー氏は一九一三年より一九一五にかけて開原より入り、朝陽鎮輝南を経て蛤蟆河上流地方を探検した際



(影撮田山) 岩武玄の屯大洲滿

火口湖二つを發見し、又土人獵夫の談によりて其の東方及び南方に同様の湖七十二個あるを知つたが何れも同一系統と斷定し、尙同河の谷を上つて火山岩滓や熔岩の露頭を屢々發見し、又花崗岩塊上の柱狀玄武岩の厚い層をも見受けた云々と、氏の旅行の目的は主として動物の研究にあり、地形の踏査は寧ろ副のやうで

あつたから詳細の説明がないので聊か物足らぬ感があるが同地方に比較的新しい火山的活动のあつたことは想像するに難くない。

次に第二の興安嶺東側の構造線上には黒龍江省の伊勒呼里山脈と小興安嶺との交會點附近に有名な烏雲和爾冬吉火山 (Yum Kholdongi) がある。此山の活動に就ては支那側の文獻として寧古塔紀略の中に左の面白い記事がある。

「前略」至墨爾根。木城沙地。都統鎮守。又一千里至圖魁(註曰齊々哈爾城)。木城沙地。都統鎮守。離城東北五十里有水蕩。周圍三十里。於康熙五十九年六七月間。忽煙火冲天其聲如雷晝夜不絕。

聲聞五六十里。其飛出者皆黑石硫黃之類。經年不斷。竟成一山。兼有城郭。熱氣逼人三十餘里。

只可登遠山而望。今熱氣漸衰。然隔數里人仍不能近。天使到彼查看亦只遠望而已。嗅之惟硫黃氣。至今如此。亦無有識之者。「後略」

本書は清の康熙六十年吳振臣なるものゝ撰に係る。振臣は江蘇省吳江の人で字を南寧と云ふ、順治の末年に彼の父兆鼐が冤罪を被り吉林省寧古塔に配竄せらるゝや、振臣往て父を省し、其の序を以て北滿一帯を旅行し踏査見聞した所を紀行的に録したのが是である。内容は振臣が旅行せる地方の形勢、沿革、風俗、物産其他各地の珍奇な現象が載せてある。此書の價值は滿洲の歴史、地理、土俗等の研究上既に定評のあることで今之に就いて論する要はないが地學的記載の方法の進まない支那人の書いたものとしては稍要領を得てゐる。即ち初は周圍三十支里の池であつたが康熙五十九(一七二〇)年六七月の間に大噴火をなした。其噴出物の中に黒石とあるは玄武岩か何かの熔岩であ

つて遂に一の火山を生じ其後餘勢を續けて硫黃の氣を噴いてゐたが其の熱氣は人に逼ること三十餘支里にも及び遠山に登りて望むことを得るのみ云々であるので其の激しさが想像せられる。

此火山が世界の學界に知られ始めたのは露の地學者ワシリエフ Wassiljew が其の調査の結果を一八五五年頃にペルリンで發表してから以後である。ジョースの地相論 Face of the Earth 第三卷にはムシケトフ Muschketow の Physical Geology の中の此山の記事を引用してゐる、之に據ると其の位置を北緯四八度四〇分東經一二六度二七分嫩江の上流メルゲンの東南東一〇〇 verst としてゐる、即ち墨爾根^{メルゲン}の東南東約二十七里黑龍江省城の齊々哈爾の北北東約六十里に當り浦鹽斯德附近の海岸から約百九十里の地點に位してゐる、尙同書にマナキン Manakin に據りて嫩江の一支流諾敏河の屈曲點に Shater 熄火山あり附近の平地からの高さ一六三・五米其の噴火口の直徑四〇〇米深さ三六米で火口は西側に開き、四五度の角度で其火口を充してゐる沼に傾く云々と述べ又ポタニン Potanin に據りて墨爾根から愛琿に向ふ途中には熔岩の露頭が多くして Koronan 山の如きは火口をへ備へてゐると記し、かく爾墨根は西は Shater 山より東は Ujun Kholdongi 山に至るまで二〇〇 verst の間に横はる新しい火山地域で取圍まれてゐるとまで言うてゐる。滿鮮の境上に聳ゆる白頭山や其の附近に連なる火山群に就ては從來内外人の多くの報文があつて周知の事に屬するかは今は其の方面のことには論及しないが從來火山地帶としては餘り省みられなかつた滿洲にも又東

蒙古の地方にも比較的新しい時代に活動した火山の存在が此地方の探検によつて次第に知られ、今後も馬賊などの危険が薄らぐに従つて地質地形の調査が進めばそれ以上に新事實が判明するに至るだらう。

朝鮮の名山

白頭山	二、七四四米	咸鏡北道
漢拏山	一、九五〇米	濟洲島
智異山	一、九一五米	慶尙南道(五山の二、南嶽)
妙香山	一、九〇九米	平安北道(五山の二、西嶽)
金剛山	一、五三八米	江原道(五山の二、東嶽)
五臺山	一、四三四米	江原道
太白山	一、五六一米	江原道
俗離山	一、〇五七米	忠清北道
九月山	九五四米	黄海道
三角山	八三六米	京畿道(五山の二、中嶽)